様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６６４０

研究課題名（和文）戦前・戦中期東アジアにおける音楽ジャンル観の変遷

研究課題名（英文）Transition of Values on Music Genres in East Asia before and during World War II

研究代表者
葛西　周（Kasai, Amane）

東京藝術大学・大学院国際芸術創造研究科・講師

研究者番号：００５８４１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前・戦中期の東アジアにおける音楽ジャンル観の構築と、各ジャンルの音楽を通じたナショナル・アイデンティティの形成について、資料調査に基づき明らかにすることを目的とした。対象時期の新聞・雑誌・ラジオプログラム・レコードなどで音楽ジャンルや音楽関連用語がどのような文脈で用いられ、いかなる音楽内容を意味していたかを、地域ごとに時系列に即して比較・分析した。さらに、各音楽ジャンルが同時期のメディア・プロパガンダといかに結びついていたか、他方で文化統制に応じてそれぞれのジャンルの音楽がどのように再編されたかについて、概念規定と音楽実践の双方の変遷から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、音楽ジャンルの枠組み自体の不確定性を問題とすることで、新たな視点や史料の読みの可能性を示唆した点にある。各ジャンルの本質的特徴が何であるかは語り手や社会的背景などの条件で変わってくるため、ジャンルをめぐる語りは時に矛盾するほど異なり、音楽実践にも影響を及ぼしてきた。こうした枠組みの不確定性と音楽実践との相互作用についての歴史的実証は、これまで音楽学・歴史学いずれの分野でも見られないものであり、また隣接領域のジャンル論にも寄与できる。同時に、本研究のアプローチは国や分野、時代を問わず、文化を通じたアイデンティティ形成の問題に援用可能である。

研究成果の概要（英文）：This research reveals how values or labels have historically been put on music genres as well as how national identity has been established in relation to each genre of music, contrasting cases in East Asia before and during World War II. It investigates the musical terminology used in newspapers, magazines, radio programs or records to clarify its contexts and meanings. In terms of conceptualization and musical performances, it also considers how each genre of music has been connected to the propaganda and restructured according to the cultural policy.

研究分野：音楽学

キーワード：ジャンル論　日本音楽史　ラベリング　ナショナル・アイデンティティ　ポストコロニアル理論　満洲　台湾　朝鮮

１．研究開始当初の背景

(1) これまでの研究で代表者は、メディア・イベントにおける音楽創作・展示・演奏から事例を抽出することにより、近代日本国家が新たな演奏・聴取空間を形成していく過程や、そこに取り込まれた多様なジャンルの音楽とイデオロギーとの連関を追究してきた。そのような研究を進める中で新たに浮上した、それぞれの音楽ジャンルはいかに意味づけられてきたか、ジャンル観はどのように構築され変遷してきたのか、そしてどういったジャンルの音楽が文化を通じたナショナル・アイデンティティ形成のツールとして機能したか、という問題を本研究課題で追究することとした。

(2) 音楽ジャンル区分やそのイメージに関する研究は近年徐々に見られるようになり、たとえば西島千尋は、日本における音楽鑑賞教育の観点からクラシック音楽観の構築について考察している（西島 2010）。しかし既存の音楽ジャンルについての研究は、特定のジャンル区分の成立を前提として、個別のジャンル（特にポピュラー音楽研究では定義論争等）に焦点を絞ったものに限定される傾向にある。こうした成果をより大きな文脈に位置づけるには、マクロな視点で区分の成立過程や複数のジャンル観の相互作用を射程に入れる必要がある。そこで本研究は年代を戦前・戦中期に設定し、これまでに応募者が解明してきた、音楽の近代化の過程で築かれた概念や価値観が、戦時期に強化され変容する際の力学に着目した。

２．研究の目的

本研究の目的は、戦前・戦中期の東アジアにおいて音楽ジャンル観がいかに構築されたか、ナショナル・アイデンティティが音楽ジャンルを通じていかに形成されたか、という問いを明らかにすることである。音楽ジャンル区分は各時代の文脈に即したルールの選択によって、絶えず更新され共有が試みられてきた。その過程でジャンル観が構築され、さらにそのジャンル観が各音楽ジャンルの歴史的・社会的位置づけを左右する、という循環的な構造にある。他方で、ジャンル区分のされ方は音楽の創作や演奏に際する慣習にも影響を及ぼすものでもあるため、その考察は、対象年代の音楽実践のあり方の解明に繋がると言える。なお、本研究で扱った音楽ジャンルは、「クラシック」「ジャズ」「タンゴ」「ハワイアン」といった種目から「洋楽」「邦楽」あるいは「純音楽」「軽音楽」等の相対的区分、「流行歌」「歌謡曲」まで多様な基準に及び、ジャンル観を形作る上で影響力を持つと考えられる「国民歌謡」「愛国歌謡」ないし「敵性音楽」「頽廃音楽」といったラベリングも問題とした。

３．研究の方法

(1) 本研究は、①各音楽ジャンルの位置づけ②各ジャンルの音楽を通じたナショナル・アイデンティティの形成、という二つの切り口から重点的に資料を分析した。すなわち、①対象時期の新聞・雑誌・ラジオプログラム・レコードなどで音楽ジャンルや音楽関連用語がどのような文脈で用いられ、いかなる音楽内容を意味していたかを、地域ごとに時系列に即して比較・分析した。②さらに、各音楽ジャンルが同時期のメディア・プロパガンダといかに結びついていたか､他方で文化統制に応じてそれぞれのジャンルの音楽がどのように再編されたかについて、概念規定と音楽実践の双方の変遷から考察した。調査に先立ち、音楽学分野および隣接分野におけるジャンル観に関する理論を整理した上で、検閲記録や文化運動資料、事前検閲下にあったラジオ放送プログラム、展覧会目録、一般紙誌ならびに音楽専門紙誌の関連記事を収集・考察した。

(2) 調査範囲は戦前・戦中期（19 世紀後半から 20 世紀前半）の日本ないし当該時期の日本の植民地を中心とした東アジア地域とし、日本が清より台湾を割譲された 1895 年から、敗戦に伴いその領有権を放棄した 1945 年までを網羅した。無論この期間には、朝鮮統治期（1910 年韓国併合～1945 年領有権放棄）および満州国時期（1932 年建国～1945 年崩壊）も含まれる。戦前・戦中期を対象として設定した理由は二点ある。第一に、国家の意図が顕著に発露し、文化統制や文化を通じたプロパガンダが日本の国内外を問わず積極的に展開された時期であり、ジャンル区分に働く力学が見えやすいからである。とりわけ太平洋戦争期の日本は、広範なジャンルの音楽がその都度適宜意味づけされて国策に回収された、いわば「音楽の総動員」の状態であった。情報局や大政翼賛会などの国策団体、新聞雑誌などのマスメディアは、時局に適切な音楽が何かという問題を取り上げ、こぞって音楽ジャンルの定義論争や意味づけをおこなうようになる。それに従ってラジオ放送やレコード発売にあたる検閲も強化され、同時に線引きの曖昧さも露呈したのである。第二に、当該時期には次第に総力戦遂行を目的として国家のイデオロギー諸装置が機能するとともに、事物の体系化や概念規定が活発化したため、音楽のジャンル区分が強化･再編成される際の力学が明瞭に現れたと見なすことができるからである。よって、研究課題の解決に最も適切な対象時期と考えた。

４．研究成果

(1) 戦時期の音楽ジャンル観には文化統制機関の政治的方針が過分に反映されており、ジャンルの区分方法や意味づけのされ方自体が常に変動しつつ極めて曖昧なまま共有されていた。なかでも音楽ジャンルをめぐる相対的価値付けの論理について、本研究では検討した。当時「軽音楽」と相対する「純音楽」と見なされていたクラシック音楽は、戦時下になると聴く者を高尚で特別な人間だと己惚れさせる性質が指摘され、当時「愛国音楽」とみなされていた浪花節に対して「男らしくない」ものとしてジェンダー化される言説も見られた。他方で 1930 年代半ばからラジオ番組のプログラムや新聞雑誌で散見される「軽音楽」は、ジャズ、タンゴ、ハワイアンなどクラシック以外の外来音楽を包括する語として使われるようになったが、こうした外来音楽は戦時下では「敵性音楽」や「頽廃音楽」などと称されて検閲や自主規制の対象となった。このような背景から、時局に不相応と見なされた外来性を排除し、「日本的軽音楽」を創出すべきという議論が導かれた過程を明らかにした。

(2) 戦時下の日本によるメディア・プロパガンダにおいて、アジア土着の伝統的民族音楽がいかに組み込まれたかについて、「大東亜音楽」というカテゴリの構築を例に検証した。戦中の音楽を通じたプロパガンダとしては、前述のようにジャズをはじめとした外来流行音楽を「敵性音楽」として検閲・排除する消極的統制と、軍歌や国民歌謡など時局に即した新しい音楽の創作を奨励する積極的統制の両側面が見られる。後者の動向として、近代以降、西洋音楽と比して「劣ったもの」とみなされる傾向にあったアジアの民族音楽は再評価され、大東亜文化圏構想と相俟って「大東亜音楽」として位置付けが試みられた。そのような運動を牽引していた音楽学者たちによる雑誌記事の言説および音楽展覧会開催の事例から、「大東亜音楽」の思想がいかに形成されていたかを考察し、日本の文化的優位性を主張する基盤としてセルフ・オリエンタリズムが機能していたことを指摘した。

(3) 満洲については、音楽文化工作の観点から日本の音楽ジャンル観に見られる流動性につい

て調査を進めた。日本統治下の満洲には様々な文化的組織が設立され、日本の音楽家たちが度々訪れて演奏や創作、音楽教育に携わった。戦争による動乱の中、満洲には多様なジャンルの音楽があふれ、各ジャンルをめぐる価値観が常にその時の社会的状況を反映して変化を続けていた。そして、ほとんどの新聞雑誌事業を政府関連機関や文化統制機関が運営していた満洲においては、官報等に限らず、一般紙誌でも音楽の「敵性」や「頽廃性」が議論され、自主規制の風潮が蔓延していた。他方で「音楽浄化運動」という名のもと、ジャズ等の批判対象になりがちだったジャンルを愛国的な「国民音楽」に取り込むような、既存のジャンルの再文脈化を確認した。

(4) 台湾に関しては、国立台湾歴史博物館所蔵の植民地期文化映画フィルムの調査機会が得られたため、映画で用いられている音楽のジャンル選択およびその記号性について調査した。植民地としての台湾を日本に紹介する目的で作られた宣伝映画では、台湾各地の民族音楽や流行音楽が用いられ、観客のエキゾチシズムを刺激するような形で地域性が聴覚的にも前景化されていた。さらに、ハワイアン風にアレンジされた音楽の使用には、地理的に離れた複数の地域を「南国」として他者化し、かつ時に同質化した近代日本の幻想を表象するジャンルとしてのハワイアン音楽の機能が確認された。他方で、台湾における軍事啓蒙的映画では、行進曲や軍楽に限らず、音楽自体が持つ文脈とは異なる形でオペラやオペレッタ等の楽曲が多用されていることから、クラシック音楽が近代化を表す記号として参照されてきたことが例証された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 葛西　周「「東亜」と「郷土」のイデオロギー：戦時下の音楽関連記事および音楽展覧会の考察から」『JunCture 超域的日本文化研究』第 9 号（名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター）、2018、pp.60～72

② 葛西　周「日中戦争期の新作レビュウにおける「中国」表象とその背景：宝塚歌劇を中心に」『演劇研究』第 40 号（早稲田大学演劇博物館）、2017、pp.87～101

〔学会発表〕（計 10 件）

① KASAI, Amane “Theatrical Revues at Hot Spring Resorts in Japan.” Asociación Española de Estudios de Asia Oriental 1st International Conference, マラガ大学（スペイン・マラガ）、2018 年 6 月 21 日

② 葛西　周「音楽実践の場としての温泉」国際日本文化研究センター共同研究「音と聴覚の文化史」第 5 回研究会、国際日本文化研究センター、2018 年 2 月 24 日

③ KASAI, Amane “Rethinking Performance Spaces from the Perspective of “Music Tourism Studies”: Focusing on Hot Spring Resorts in Japan.” 第 12 回中日音楽比較研究国際学術会議、上海音楽学院（中国・上海）、2017 年 9 月 15 日

④ 葛西　周「「耳の脱植民地化」論再考：日本におけるヴァナキュラー音楽をハワイアンから検討する」第 28 回日本ポピュラー音楽学会大会ワークショップ「初期電気録音時代の世界音楽地政学」、立教大学、2016 年 12 月 4 日

⑤ 葛西　周「聴覚的要素にあらわれる「中国性」：戦時期宝塚歌劇の楽曲を事例として」国際学術検討会「1940 年代戦時プロパガンダとメディア表象」、清華大学（中国・北京）、2016 年 10 月 8 日

⑥ 葛西　周「植民地期台湾の文化映画における音楽 :『全台湾』を中心に」植民地期台湾映画フィルム研究会、日本大学、2016 年 9 月 23 日
⑦ 葛西　周「レビュウのなかの「外地」: 日中戦争期の宝塚歌劇を中心に」日本比較文学会第 40 回中部大会、名古屋大学、2016 年 5 月 14 日
⑧ 葛西　周「戦時下の趣味としての演奏活動：日本・台湾・中国を比較して」「中国建国前夜のプロパガンダ・メディア表象：劇場文化と身体芸術のコラボレーション」第 1 回公開ワークショップ、名古屋大学、2015 年 11 月 21 日
⑨ 葛西　周「日本におけるマンドリンの受容と展開:戦前アマチュア音楽活動の一事例として」第 11 回中日音楽比較研究国際学術会議、新疆芸術学院（中国・烏魯木斉）2015 年 11 月 9 日
⑩ 葛西　周「明治期日本の万博への参加：楽器・音楽書等の音楽関連出品物を中心に」国際日本文化研究センター共同研究「万国博覧会と人間の歴史：アジアを中心に」第 13 回研究会、国際日本文化研究センター、2015 年 10 月 18 日

〔図書〕（計 3 件）
① 葛西　周「植民地期台湾の文化映画における聴覚的要素の検討」、三澤真美恵編『植民地期台湾の映画：発見されたプロパガンダ・フィルムの研究』、東京大学出版会、2017、pp. 171～200（分担執筆）
② 葛西　周「リンゴの唄」「日本万国博覧会」、戸ノ下達也編『〈戦後〉の音楽文化』、青弓社、2016、pp. 63～64／205～207（分担執筆）
③ 葛西　周「日中戦争期の満洲における文化工作および音楽ジャンル観に関する考察」、馬場毅編『多角的視点から見た日中戦争：経済・思想・文化・民族の相剋』、集広舎、2015、pp.175～196（分担執筆）

〔その他〕
ホームページ等
https://researchmap.jp/read0139754/

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。